日本医師会最高優功賞受賞 道北ドクターヘリ就航

北海道医報通信員
旭川市医師会　理事
上村産科婦人科医院　院長
上　村　利　彦

旭川市医師会医学会が日本医師会最高優功賞を受賞し、平成21年11月1日に日本医師会館において行われた授与式に増田旭川市医師会長が出席し拝受しました。旭川市医師会医学会は昭和32年に新制旭川市医師会創立10周年記念行事として第1回を開催し、昨年で第53回目となりました。

初めの頃は一般演題と学術映画が中心だったようですが、その後シンポジウム、特別講演も加わり学術活動の中心的役割を果たしてきました。本学会は開業医と勤務医の学術的な交流の場でもあります。これまで行われた一般演題の数は1,122題、特別講演は29題、シンポジウムは2回、学術映画は23本を数えております。本学会の発表内容は当医師会が年3回発行している「旭医だより」に掲載され、会員の日常診療に役立っています。平成14年度からは発表する論文・学会の報告等の中から、地域医療に貢献度の高い論文に対して、旭川市医師会賞を贈呈し、その授賞式と記念講演も当医学会で行われてきました。これまで当医学会が行ってきた功績に対して、生涯教育活動の推進に貢献した団体として、全国から唯一の表彰を受けました。

当医師会のもうひとつの話題として、昨年10月から道北ドクターヘリが就航し運行が開始されました。カバー地域は縦300㎞、横200㎞、道北一円はもちろんのこと、北は稚内、離島である礼文島、利尻島、南は占冠村、西は増毛町、東は紋別市まで及びます。道央では約5年前より1機目として手稲渓仁会病院が基地病院となり運航されていましたが、2008年の春、道内2機目のドクターヘリとしての誘致の話が医師会内部で始まりました。すでに釧路を中心とする道東地方でも誘致活動が1年前より先行していたので、容易な道のりではありませんでしたが、「助けられる命は助けたい」のもと14万名分の署名を携え、道に陳情など当医師会を主体とした誘致活動が功を奏した結果、活動開始よりわずか1年足らずで道東（基地病院は釧路市立病院）とともに導入が決定し、3機体制となりました。道北ドクターヘリの基地病院は、第三次救命救急センターでありヘリポートを備えている旭川赤十字病院が担っています。ヘリの運航会社は朝日航洋株式会社に委託しています。格納庫は赤十字病院に敷地がないため旭川医科大学の敷地をお借りし、運航圏の55市町村の資金的補助を受け設置に至りました。

平成21年10月11日には高橋道知事らを迎え、道北ドクターヘリの就航式が行われました。屋上ヘリポートでテープカットが執り行われている最中に富良野消防本部から出動依頼があり、テープカットも終わるか終らないうちに慌ただしく飛び立ったようです。

実際の運航は官制室となる通信センターに通信専門員（CS）がおり運航調整を行っていて、消防の出動要請から5分以内に離陸できる体制になっているようです。救命救急センターの事務とドクヘリ事務局が休み返上でこなし、医療スタッフであるドクター16名とフライトナース6名が現在活動しています。医療過疎地域を抱える道北地方にとって、今後のドクターヘリの活躍が救急体制の空白を少しでも無くすという点に期待しています。

産婦人科医院を開院して半年

旭川市医師会
アイ・ウイミンズクリニック　院長
石　川　睦　男

平成21年7月1日に、上川神社に隣接する緑豊かな神楽の地に19床の産婦人科医院を開設しました。

平成19年6月に定年を前に旭川医科大学を退職しましたが、臨床にいまだ未練があり、法人施設で外来を中心に勤務しておりました。平成19年の年末に旭川医科大学病院の周産母子科の科長の准教授と医長の助教の2名が、私の賞味期限の切れないうちに一緒に開業しないかという申し出がありました。熟考しないままに、平成20年の年始めに、後任の産婦人科学教室の教授に了解を得てからがスタートでした。それまで、開業ということは考えたこともなかったので、まずその道の先輩から話を聞き、業者から情報を得ながら準備を進めました。

ところが、札幌、旭川のような都市ではベッドが過剰で新規の診療所の開設が原則認可はされないことがわかりました。しかし、周産期の特例があるということで、厚生労働省に聞きに行き、北海道に申請して、平成20年6月末に19床の有床診療所が認可になりました。この間、北海道医師会の長瀬清会長はじめ医師会の皆様に大変お世話になりました、あらためて御礼申し上げます。

それまで銀行とは交渉していましたが、一瀉千里に銀行から融資の内諾を得、7月末に上川神社のそば

に土地を購入し、8月には会計事務所、9月に設計事務所、建設会社の選定を開始しました。着工は11月末でしたが、建設会社の本契約は12月末という走りながら決めていくやり方でした。建物の引き渡しは6月1日でそこまでに、助産師、看護師、看護助手、事務員の面接、採用と医療機器の選定が並行しました。さらに、厨房、清掃、クリーニングの外注業者の選考、決定を進めるといった状況で、ようやく7月1日に開院にたどり着きました。

3人とも大学病院に長く勤務していたため、物品、医療機器、人材が黙っていても有るものとインプリントされていましたが、何事も自分達が動かなければすべては回らないことを今頃分かるといった有様です。一緒に開院した2人は私よりはるかに若く、主に周産期医療に情熱を燃やしており、私は生殖医療や婦人科診療を主に担当しています。開院して6ヵ月が過ぎ、お産の予約も本年3月からある程度増えてきつつあり、婦人科手術も毎週、定期に組めるようになってきました。最近は骨盤臓器脱の症例に北海道大学病院泌尿器科から指導を受けたのち、TVM手術も手がけています。私たちは、複数の医師、コメディカルによる快適な環境で安全なお産を提供し、診療回避をせず、年齢を問わず、すべての女性の健康とQOLの向上に尽力したいと思っております。

老いゆく日々

北海道医報通信員
上川郡中央医師会　監事
水　野　清　司

老いは誰の身にも平等に、着実に訪れる。

私も老いて86歳となり過ぎ去っていった人生を思い起こし、60数年余の医師としての人生を振り返り、医師になった自分の選択は間違いではなかったと思っている。

友人医師の中には現役を退き、自由な時間を楽しんでおられる方もいる。

健康な高齢者のつもりで、仕事一筋の人生を楽しんできたのだが、忍び寄る加齢による体力の低下や日常の健康状態にも不安や衰えを日々感じるようになった昨今を思い、10年間勤務させていただいた最終の勤め先である介護老人保健施設回生苑を昨年9月に退職した。

何かが起きてから慌てたのでは遅いので、老いに対する心構えが必要になった今、老後の暮らしを支えてくれた家族や周りの人たちに負担や迷惑をかけることなく、老後の趣味を持ちながら喜びを味わってゆっくりと穏やかに過ごしてゆきたいと思っている。

最近、高齢者の問題が色々と報道されており、急速に高齢化が進む現在、在宅で介護している人の約1割が80歳以上の高齢者という「老老介護」の実態であり、尊厳なる老いをいかに生きるか、一人一人の高齢者が生き甲斐を持ち充実して生き生きと老いるための温かい高齢者対策が望まれる。

誰しも若さを保ったまま長生きをしたいと願い、「寝たきり」や「認知症」にはなりたくないと思う。しかし、いつまでも若く元気であることは誰にでも可能なことではない。

知能は中年期から老年期にかけてどんどん低下していくが、思考し判断する能力は相当最後まで残っていると言われる。正常な老化の範囲では80歳位までは、知能に大きな低下はなく心や体の健康も維持できるが、年とともに衰えは避けられず自己管理をしっかりしなければならない。

わが国でも老人は確実に増加しており、同時に医療や介護を必要とする老人も増えている。老人は老化やそれに伴う疾患によるさまざまなリスクの可能性をもちながら介護を受け日常生活を送っている人も多く、総合的なケアが必要である。

医療、看護、介護の十分な連携の下での総合的な